

「関係性の貧困」に取り組む団体



つくろい東京ファンドのマスコットキャラクター、「つくろい猫のぬいちゃん」。セーフティネットの穴をふさぐため、ほころびをつくろっている。(画像提供=つくろい東京ファンド)

「セーフティネットのほころびを修繕しよう」 をキーワードに

つくろい東京ファンド

懐かしさの漂う商店街を抜け、西武新宿線の沼袋駅から10分ほど歩くと、民家を改装した店があった。一般社団法人つくろい東京ファンドが運営する「カフェ潮の路」(以下、潮の路)だ。2階に上がると木のぬくもりを基調とした小さなカフェスペースがあり、昼を過ぎた雨の日にも関わらず、店内はお客でにぎわっていた。

潮の路は、路上生活を経験してきた人たちの居場所であり、働く場でもある。そう言われてみれば、男性の率が高い。しかも、カフェの男性客というと、独りのイメー

ジが強いが、ここでは男性たちが集いおしゃべりをしている。ほかに、近所の人や学生風の人もいて、誰でも居られる雑多な雰囲気心地良い。そのなかに、つくろい東京ファンドの代表理事・稲葉剛さんもいて、遅いランチをとっているとところだった。

「貧困」と聞くと、路上生活者や生活困窮者の人びとを連想する人が多いだろう。こうした人びとの抱える課題は経済的なものだけでなく、心身の障がいがあったり、家族と疎遠になっているなど、いくつかの問題が複合的に絡み合っ

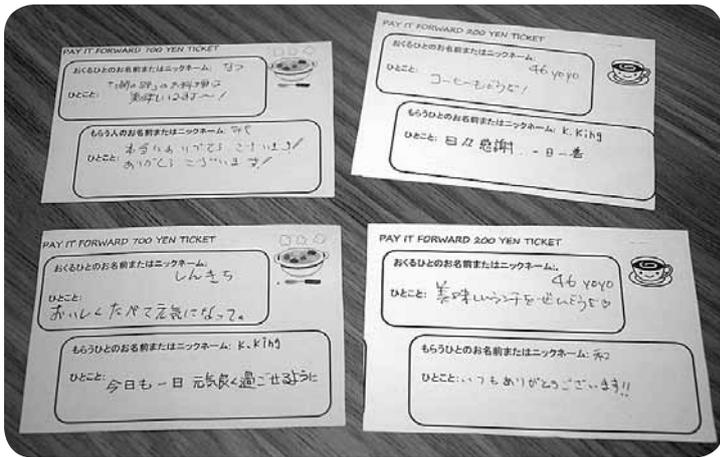
ていると言われている。困窮状態や路上生活が長くなると、ますます生活のための情報を得たり、支援を受ける機会が乏しくなってしまうのではないだろうか。「貧困」は、単なる経済的貧しさだけではないのではないか。そうした視点から、稲葉剛さんにお話をうかがった。

「ハウジングファースト」のモデルづくりを

つくろい東京ファンドは、2014年に「市民の力でセーフティネット」¹⁾のほころびを修繕しよう!」を合言葉に、東京都内で生活困窮者の支援活動を行ってきた複数の団体のメンバーが集まり、設立された。すでに活動していた人たちが、なぜ新たに団体をつくったのだろう。稲葉さんは言う。

「2002年にホームレス自立

(左) お福わけ券。メッセージによりお互いを想像できる。
 (右) カフェ潮の路の外観。(写真提供=つくろい東京ファンド)



支援法²ができて、路上生活者への生活保護の適用が進んだことや、民間の支援活動などにより、路上生活をする人の数は減少しました。しかし、まだ路上には多くの人たちが取り残されていますし、ネットカフェなど路上以外の場所でも暮らす人たちも多くなります。精神科医師の森川すいめいさんらの調査によると、路上にいる3人に1人に知的障がいがあり40〜60%に精神疾患の疑いがあるそうです。生活保護を受けて施設に入っても、プライバシーがなかったり、いじめに遭うなどして、路上に戻るケースも少なくありません。そこで、私たちは「ハウジングファースト」のモデルをつくろうと考えました。ハウジングファーストとは、住居を失った生活困窮者の支援において、まずは安定した住まいを提供することを最優先に行う、という考え方です¹。

従来の支援は、就労優先であったり、施設で生活訓練をした上でアパートに移行するのが一般的だったが、それよりも安心に過ごせる住まいを優先した方が有効であることが立証されつつあるという。

個室シェルターをつくろうと

考えていた矢先、中野区のビルのオーナーから空き部屋を使ってほしいという申し出があった。こうした住まいによる行政の支援はないので、法人を立ち上げ、クラウドファンディング³など市民の協力を得て、7室の「つくろいハウス」を開設した。それが「空き家活用の住宅支援」としてマスコミで取り上げられた。東京の空き部屋率は11%強。その空き部屋を、増加しているハウジングプア(安定した住まいを喪失した生活困窮者)とマッチングするという活動が注目され、現在、つくろいハウスは23部屋となった。

「つくろいハウスは、生活保護を利用しながら、家賃と共益費だけいただいています。入居後の訪問や鍋会などをして、その後の支援も行っています。ショートステイを含めると、この3年で約80人が利用し、40人が地域生活へ移行しました。定着率は約90%で、内訳はアパート入居が約80%、グループホーム約10%です(稲葉さん)。

空き部屋活用は、やはり増え続ける貧困状態にある子どもへの支援活動とも結びつき、子ども食堂もスタートさせた。

「混ざり合い」で社会の「まなざし」を変える

「住まいの次は、仕事と居場所の支援。社会とのつながりを取り戻すことが大切です。潮の路は、職場であり安らげる場です」と稲葉さんは言う。仕事は、コーヒーの焙煎作業や1階のコーヒースタンドでの給仕などで、2階のカフェでは元路上生活の人たちと地域の人たちが場を共有する。

「顔が見えないからこそ、路上生活者や生活困窮者の人たちは異質なものとして排除されてしまう。だからこうした場が必要です。交流のツールとして、『お福わけ券』があります。次に来る誰かのために券を購入し、お金がない人はそれを使って飲食するというものです。券は200円と700円の2種類。これまで200円券は約100枚、700円券は約300枚売れ、それぞれ6割、8割以上利用されました。お福わけ券にはメッセージ欄があり、買った側も使う側も書き込めるようになっていきます。券を通じて、顔を合わせることができません。貧困や格差が広がり、社会が分断されているのでは